

中国地方に於ける平安時代の土器・陶器 の諸様相と今後の課題

伊 藤 晃

1. はじめに

平安時代における中国地方の土器生産について見る場合、その前後の時期即ち、六世紀から八世紀にかけて、さらに鎌倉時代から室町時代にかけての時期に比べ具体的諸様相については余りはっきりしていないということを最初に断っておかねばならない。

前段階における古墳時代から奈良時代の須恵器生産の場合、備前国110ヶ所、備中国40ヶ所、美作国10ヶ所、備後国70ヶ所、安芸国10ヶ所、周防国10ヶ所前後の窯址が知られており、各地域で編年も試みられている。

また後の中世窯は、備前焼の窯址150ヶ所、備中亀山焼窯址20数ヶ所、美作勝間田焼窯址20数ヶ所の窯址群が知られ、その調査、研究も徐々にではあるが進められている。そして中世土師器も広島県福山市草戸千軒町遺跡をはじめ、福山市鞆の港町、尾道市街地の調査が進められ、各地域の土師器の実態も明らかになりつつある。その反面、平安時代の土器、陶器に関しての調査、研究は近年、国府址、郡衙址、集落址などの調査が行われ、次第にその実態について明らかになりつつあるとはいえ、中国地方では余り進んでいないのが実情である。

2. 平安時代における中国地方の須恵器生産

10世紀前半に編纂された「延喜式」に記載された貢納須恵器は、10世紀前後の生産の状況のある程度反映させていると見ることが出来る。それによると、備前国は、主計30器種、3,826口、神祇踐大嘗祭料15器種、480口、長門国、民部8器種、100口で、各器種が現在の須恵器の名称との比較の問題も残るが、先に述べた古墳時代以降の弱小生産地は貢納の対

称となっていないことに気付かれるであろう。それでは延喜式編纂期前後即ち、10世紀前後、あるいはそれ以降の中国地方における須恵器窯址について見るとどうであろうか。備前国の10数基の古窯址以外には各国とも極端に少いかあるいは現在までの所全く発見されていない。そして10数基の窯址が存し、また最大の貢納国である備前国についてはどうであろうか。備前国の須恵器生産については、これまで多くの論功がなされ、良く承知されている所である。しかしながら、平安時代のそれについては、間壁忠彦氏がかつて『古代の日本』4中国・四国、1970・角川書店「備前の古窯」において述べられているのみで余り多くの論功もない。今これ以上の詳細について述べるだけの資料もない。くり返しになるかも知れないが記して見たい。

6世紀中葉以降100基以上の須恵器窯を擁した邑久古窯址群の一角・備前市佐山地区(旧邑久郡)に佐山古窯址群が存在する。この古窯址群は、奈良時代後半から平安時代後半まで続き、20数基からなっている。半数近くが平安時代に属するものである。同じく邑久郡長船町油杉には11世紀前後の窯址が数基存している(資料1)のみである。佐山光明見古窯址の資料(資料2)は、備前市伊部周辺にみられる備前焼Ⅰ期(間壁編年による)とされる12世紀の前段階と見ることが出来る。器種としては、壺、甕、瓶、椀から成っている。このように10世紀前後において中国地方最大の須恵器貢納国の備前も、平安時代中葉以降は、古墳時代に比べこのように細々とした生産状況といわざるを得ないのである。

これに対し同じ延喜式において須恵器貢納

国である讃岐国、播磨国の場合はどうであろうか。讃岐国は、主計上において18器種、3、151口、播磨国は、38器種、2,696口となり備前と良く似た傾向が見られる。讃岐では、6世紀後半に生産が開始され、12世紀頃まで綾歌郡陶古窯址群を中心に100基近くの窯址が連続と生産を展開する。しかし古墳時代以降の生産に比べ、平安時代の生産は、備前と同じく衰退しているといわざるを得ない。そして、中世窯へとつながらずに12世紀前後に廃窯してしまうようである。また播磨においては、6世紀前半に生産が開始され、12世紀前後まで播磨の各地域に生産拠点が分散しているけれども生産は続けられている。相生市緑ヶ丘古窯址群は12世紀を中心として100基以上の、また神戸市神出窯址群は11～12世紀を中心として40数基からなり操業が行われている。そして12世紀以降は、明石市魚住窯において集約された形で生産が行われ中世窯へと発展している。このように、10世紀前後にはほとんど同じような生産規模で、同じような貢納須恵器を焼成しているながらそれ以降の生産状況が異って来ていることを見る事が出来るのである。備前、讃岐がほとんど同一郡内に窯址が集中し生産を行っているが、それは余り活発に行われていない。それに対し播磨の場合は各地域に分散しているが、多くの窯址で活発な生産活動が続けられている。これは一つの生産集団を把握している者の違いによるものとも考えられる。そして「延喜式」に記載された貢納制以後の生産の違いは、各国の律令制の弱体化への段階の差を表わしているといえる。

3. 中世窯への展望

平安時代後半、特に12世紀前後になると須恵器の伝統を引き継ぎ中世へと続く窯址が備前国、備中国、美作国、備後国の各国で出現する。備前では、備前市伊部を中心に12世紀前後に開始される。間壁氏の備前焼編年というI期の時期がこれにあたる。初期（I期一

A）の稲荷山窯址、大明神窯址などでは、壺、甕、鉢、椀、小皿、瓦、などが焼成され、甕の外面には平行叩きを施し、内面は、板状工具による横方向の条痕状の調整を行っている。先に述べた佐山光明見古窯址、油杉古窯址の後に来るものであるが、手法等少し異なる点がある。I期一B段階の大ケ池窯址へと連続してゆくが、平行叩き、内面調整は、より荒く雑になり、やがてそれも見られなくなる。そして備前焼II期の鎌倉時代の窯址へと続いていく。この段階までまだ還元炎焼成がほとんどであり、須恵器と同じ色調・胎土である。

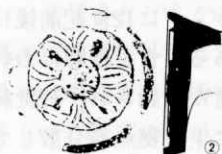
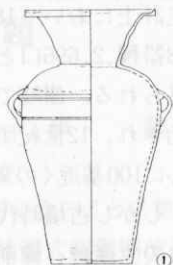
備中では、倉敷市玉島八島（旧浅口郡）を中心にして亀山焼が12世紀前後に開始される。亀山神前神社周辺を中心にして20数基が確認されている。灰原の採集品のみであるが、甕を中心に、壺、鉢、瓦などを焼成している。初期の甕の外表面は平行叩き、内面は同心円文叩きを持ち、成形技法・色調・胎土もほとんど須恵器と変わらない。その後外表面に格子目叩き手法があらわれ、後には格子目叩きが主流になる。初期の段階では、焼成技法・色調・胎土等々において須恵器の手法とほとんど同じと記述したが、新しくなるに従い軟質になる傾向を示し、土師質、あるいは瓦質と呼んでもいい様なものまで含まれるようになる。さらに焼成器種も増加する。備中を中心にした瀬戸内沿岸地方に多く見られる。中世全期間を通じ生産は行われているが細かい編年等の作業は今後の課題である。

美作においては、勝田郡勝央町を中心にして勝間田焼と呼称されている須恵器系の焼物がある。これも12世紀前後突如、生産が開始される。現在まで20数基が確認されている。焼成器種は、壺、甕、鉢、椀、小皿などを焼成している。椀の生産が主流を占め、口径15cm高さ5cm前後で底部は糸切り底である。まれに高台を持つものがある。甕の外表面は格子目叩きがほとんどで、平行叩きがまれに見られる。内表面は横方向の強い条痕状の調整を行っている。

外面の平行叩き、格子目叩きを別にすれば備前焼Ⅰ期—Aの手法と極似している。胎土・色調は砂分が少なく、どの器種も灰色～青灰色を呈し良く焼き締まっている。製品は美作一円を中心にして、伯耆国、因幡国などの山陰方面にも見られる。終焉の時期ははっきりしないが、13世紀末～14世紀頃には廃窯しているようである。

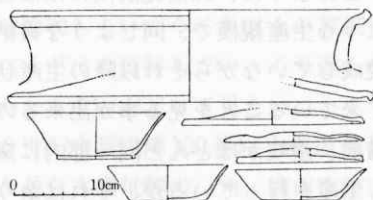
また備後では、福山市熊野町から沼隈郡沼隈町一帯にかけて、壺、甕、椀、鉢などを焼成している窯址群が存在する。西川宏氏は沼隈焼と呼称されているが、実態については今後の究明を待ちたいと思う。

以上のように中国地方においては、12世紀前後に須恵器系統の焼物がほぼ期を一にして出現する。そして中世窯業として発展あるいは衰退の道をたどる。備前焼は、鎌倉時代以降、酸化炎焼成、粘土などに改良を加え、中世焼締陶として、壺、甕、播鉢を中心に西日本一帯にその販路を拡大し、14世紀後半には、播磨魚住窯をも淘汰し、西日本の雄窯に発展する。そして魚住窯は播磨周辺の地域窯として残るが14世紀後半～15世紀前半頃までには消滅する。一方備中亀山焼は次第に軟質陶となりながらも、甕、播鉢、鍋、釜などの日用雑器を生産しながら17世紀頃まで存続する反面、美作勝間田焼、備後沼隈焼は、魚住窯よりも早く中世前半で廃窯に追い込まれるようである。

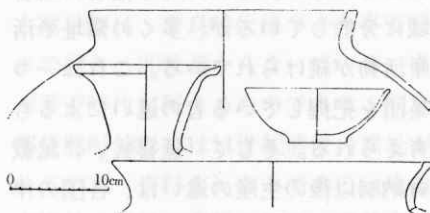


資料1

- ①油杉窯址出土遺物
- ②備前国分寺出土瓦（油杉窯と同範）



佐山東山古窯址の須恵器（平安時代前半）



佐山光明見古窯址の須恵器（平安時代後半）

資料2

- 佐山古窯址群出土遺物
- 間壁彦彦「備前の古窯」『古代の日本』
- 4. 中国・四国、1970. 角川書店より

《 発 表 》

岡山の伊藤です。どうかよろしくお願いたします。中国地方という非常に広い地方のことを述べるわけですが、西の方の長門、周防とかいう方は、むしろ亀井明德先生にやっていた方が適当ではなかったかと思えます。最近の報告では、長門で20基ほど、これはすべての時代にわたりますけれども、この内平安時代の窯がだいたい11基ほどです。それから周防の国では、約25～6基ほど発見されておりまして、その内10基ほどが平安期に入るものです。これの細かいことにつきましては、『周陽考古学研究所報3』に桑原邦彦さん、あるいは池田善文さんが連名で「防長地域の須恵器窯址と編年研究」というものを著わしておられますので詳しくは、それを見ていただきたいと思えます。周防の方では、9世紀中葉ないし後半とされている時期に生産は終わっているようであります。それから安芸、広島県の西半部ですね、安芸に関しては、ほとんどが古墳時代から奈良時代にかけての須恵器窯址で10数基発見されているのみです。平安期のものについての報告あるいはそういうものは無いようであります。その隣の備後の国には今のところ窯址が約70数ヶ所ありますけれども、平安期に入るものはその中の数基で10基に満たないものであります。それから備前につきましては、古墳時代から奈良・平安時代にかけて150基ほどの窯がありますけれども、これも平安時代の窯となりますと20数基と非常に少ない窯址数であります。それから備中をとばしましたけれども、備中の方でも40数基窯址がありまして、平安期の窯といわれるものは4～5基あるかなしでございます。この4～5基あるかなしかと申しますのは、ここで平安期といえますのは、前提として12世紀段階のものは、今は省かせていただいております。ですから、9世紀、10世紀、11世紀代のものというふうに理解していただきたいと思えます。今までのすべてのものがそうであります。これは後で述べます一つの画期がそういう時期にあたるのではないかと考えているわけです。それから美作の国では、須恵器窯は10数ヶ所ありますけれども平安期の窯址は今のところほとんどみつかっておりません。

それから播磨に関しましては、今までの地域と非常に異なりまして、これはもう播磨だけで平安期の報告をどなたか兵庫県の方にしていただいた方が良かったのじゃないかと思うわけなんです。先程、中村さんも少し札幌の報告をされておりましたけれども、兵庫の森内秀造さんなどの調査によりますと相生の緑ヶ丘古窯址群というのがだいたい9世紀から12世紀ぐらいにわたって110数基知られております。それから先程の札幌なんかも10数基、それから加東郡社町、滝野町などにも、11世紀前半から12世紀前半にかけての窯跡がございます。それから、先程の中村さんがおっしゃった西脇市の金城池周辺にも数十基、それから三木市、これはかつて『三木市史』などにも報告されていますけれども10数基あります。それから11世紀末ないし12世紀初め頃出現します神出窯が約40数基、それから明石の魚住窯が、だいたい50基前後あります。むしろ、播磨が中国地方に入るかどうかという疑問もあるわけですが、瀬戸内海沿岸という形では播磨もいっしょにしてみています。しかし、今までの各国の状況とは非常に違い、播磨の平安期の須恵器生産が非常に盛んであるということは、この窯跡数からもわかっていただけるのじゃないかと思えます。それから山陰に関しては、あまり報告例がないんですけれども、ここも5世紀前後、安来市の高畑^{たかばた}窯址に数基、5世紀終末から6世紀にかけての窯跡が何基かございます。遺跡台帳によりますと島根、鳥取両県とも古墳時代あるいは奈良時代の窯跡がみられるのですけれども、平安時代のものでは調査された例もなく、あまりはっきりわかっておりません。——そういうことを前提におきまして、この中国地方における10世紀前後の状況は、この頃編さんされた『延喜

式』という本があるわけですが——『延喜式』という本を信じるかどうかという問題もありますが——ある程度この時期の須恵器生産の状況をあらわしているものではないかと思ひまして、一応とりあげてみました。これで見ますと備前の国がレジメにも書いておりますように主計で30器種、3,826口それから神祇踐祚大嘗祭料15器種480口それから長門の国これは瓷器となっておりますので、これも後で少し問題になるかと思ひます。民部で8器種100口こういうものが、貢納須恵器としてでてくるわけなんです。ですから10世紀前半ごろまでの生産状況というのは、やはり備前もある程度をしていたわけなんですけれども、その後の状況についてというのは非常に不明確というんですか、わかってないことの方が多いいんじゃないかと思ひます。これは数年前に間壁(忠彦)さんが、『古代の日本4』(角川書店発行)の中で書かれておられる以上に新しい窯も資料化されておられませんし、わかっていないということが多いいわけなんです。その後の資料としては、この29ページ(本書P122)の上の図にのせてあります油杉古窯址群から出ましたこういう双耳瓶ですね双耳壺というんですか、そういうものがあります。そこでは一緒に備前国分寺の差し変え瓦を焼いております。こういう20数km離れたところの窯で焼かねばならぬほど生産が少なくなってきたおわけなんです。それに比べて、10世紀後半以降の窯址といひますのは、その29ページ(本書P122)のこれも同じく間壁さんの書かれたものを引用させていただいているわけですが、こういう甕、壺、椀というような器種が、11世紀代のものとして位置付けできると思ひます。備前ではこういう窯址しかみることができません。

それから他の『延喜式』に記載されていない国に関しましては、窯址も何基かはあるわけですが、これ以上みることができません。これと同じようなことは、同じ『延喜式』に播磨のことも記載されているわけなのですが、播磨の場合は先程言ひましたように、数百基の窯址があり、連綿と生産が続けられているわけなんです。それと四国の讃岐ではですね、『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』という本がありますが、その中で渡辺明夫さんが細かく編年紹介されております。細かくはそこへ譲りたいと思ひますが、6世紀代に生産が開始されまして、だいたい12世紀頃まで、これも連綿とつづき100基近くの窯址が残っているわけなんです。そういうことに比べてそれ以外の生産地というのは、播磨それから讃岐以外は少ないという状況です。それで讃岐の場合は12世紀以降には続かず、だいたいそれぐらいで生産は終わってしまうようです。

——それから、ちょっと後スライドを見ていただきたいと思いますので後の方は、端折ってまいりますけれども、中世窯への展望ということで、先程も少し12世紀代の平安期の窯址は、播磨・讃岐以外は、その窯址数の中へ入れておらなかったわけですが、特に12世紀前後、あるいは11世紀の終末に入るかもわからないんですが、備後、備中、備前、美作という国々で、備前の場合は一つ別にいたしまして突如といひていくぐらいに窯址が出てまいります。といひますのは備前ではむろん備前焼といひわれていますようなものになるわけなんですけれども、備中では亀山焼、美作では勝間田焼といひられているものは、だいたい12世紀の初めの段階にいっせいに出現してくるという現象があります。備前の場合でこまかくいひますと、伊部周辺に集まってくる。これが間壁さんの『倉敷考古館報』で紹介されました備前焼編年でいひますI期という時期です。これのA期・B期と呼ばれているもの、そういうものは美作の勝間田とか備中の亀山焼、あるいは備後の、これは窯数があまりはつきりしないわけなんですけれども、沼隈焼と呼ばれているものがあります。そういうものの特徴といひますのは器種の組合せが先ほど紹介のあったような札馬のものとは少し変わっておりまして壺・甕・鉢・椀・小皿・瓦というものに組合せが変わってまいります。

そしてその甕の外面には平行叩きを施しまして、内面は板状の鋭い工具によりまして横方向の鋭い条痕状の調整を行っております。それからこれは備前焼I期と呼ばれるものだけでなく勝間田焼にも見られる手法なんです。備前ではこれがずっと後まで続きましていわゆる備前焼、焼締陶としての備前焼に変わっていくわけです。逆に備中の亀山焼はより新しくなるほど軟質になっていっているようです。それとともに備中ではいままでの登窯ではたぶん壺・甕・鉢など大形～中形の器種を主に焼いておったんじゃないかと考えられます。といいますのは備前・備中南部を中心にしまして、いままで早島式土器という名で呼ばれてきた12世紀代からあるいは13・14世紀につながるものがあります。これは後でスライドで見えていただきますけれども、その窯というのが特異な窯でありまして、直径1mほど、深さが約1mほど、いわゆるロストル式の窯です。そこでは、椀・皿だけを焼成しているということが明らかになりました。ですから、これは、昨日、宿舎で2～3の方と話をしたのですけれども、いわゆる魚住窯の登窯では、甕・鉢がほとんどであって、椀・小皿というのが非常に少ない。ですから魚住窯の中でもそういう甕・鉢の生産を大形の登窯で行い、小形の窯址では小形の椀・皿類を焼成していたのではないかとという勝手な想像を今しているわけです。亀山焼と早島式土器の間でも、そういう焼き分けみたいなのをやっているんじゃないかと思われま

す。それから灰釉陶器なんですけれども、図面も何も呈示しておりませんが、中国地方で出土する代表的な遺跡といたしましては大飛島遺跡とか、美作国府・備前国府に近いところなんかから大量ではありませんけれど出てきております。これは直接こちらの方から運ばれた物じゃなくって、いったん平安京へ運ばれた後に、あるいは遣唐船なんかによって祭祀が行われるものがあるわけなんですけれども、大飛島ではそういうものが出土しているわけなんです。ですから直接こちらから運ばれる例はないんじゃないかなと思います。大飛島から出土しております物はだいたい9世紀、今朝、楢崎先生に確認したんですけれども、だいたい9世紀で終わっているということは遣唐船が廃止されるのが894年でありますからだいたいそれで一致しますし、いいんじゃないかと考えております。あと少しスライドを用意してきておりますので、新しい現代の焼物の窯まで含まれておりますけれども、ちょっと見ていただきたいと思います。

(スライド説明)

- (1)これが先ほど話しました沖の店1号窯址と呼んでいるものなんです。こういう直径だいたい1mほどで、焚口がこゝになります。これがわずかに低くなっておりますけれども、これが灰層であります。
- (2)そこではこういう直径15～6cmの土師系と言ったらおかしいんですけれども、須恵系の焼きの甘いと言った方がいいと思うのですけれども、こういう高台を持ちまして、これは糸切でだいたい高さが5～6cmあるものです。
- (3)これが底部でございまして、わずかに糸切りがあって断面が台形になる高台を持っております。ですからこれより新しいものは備前・備中を中心といたしまして岡山県南部にはこれ以降14世紀・15世紀ごろまでずっと続くものであります。
- (4)こういう非常に焼きの甘い感じのものもありますし、あとで遺物は出てきませんが魚住では魚住88号窯というのがあるんですけれども、全く今の窯と同じ状態でありまして、今まで北九州で何例か、それからこの窯と魚住で1カ所、昨日兵庫県の岡崎正雄さんの話によりますと、最近、神出でも同じようなのが今掘られているそうです。

- (5) 　　こういうふうに底部をへらで調整したり、口縁部はなでで調整しております。
- (6) 　　この瓦は先ほどの窯の、ちょっと順番が入れまちがえておりました逆になっておりますけれども、中にサナみたいなものを置くわけですね。その時に使った瓦、あるいは次に出てきますけど、
- (7) 　　こういう全くひずんでしまった甕があるんですけども、こういう単位で1つの単位がありまして、これを窯の屋根の上へ、天井の所へかぶせたり、あるいはサナ状にしてその上に並べる時に割って使ったもんだらうと思っております。
- (8) 　　これは魚住窯の29号窯でありまして、普通の登窯です。その横にこういうほとんど形態を同じくするロストル式の窯と呼んだ方がいいと思いますけれども、そういう窯が出てきております。
- (9) 　　焼いているものは須恵器です。先ほどのような土師質的なものは全然ないそうです。
- (10) 　　これが掘る前の、これが焚口でございます。
- (11) 　　中をサナ状にしきっております。先の瓦とか、甕の破片はこういう風に使っていたのかもわかりませんし、あるいはこの上へある程度かぶせるために使っていたのかもわかりません。そういうものであります。
- (12) 　　これも今の焚口からみたところです。
- (13) 　　これは魚住のいわゆる鉢ですね。こういう手の灰色の鉢はほとんどこういうものでございます。
- (14) 　　これは亀山系、—— 亀山は今のような窯で焼かれたんじゃないかと思うんですけども、もう少しあれより大きいかもわかりません、—— の擂鉢。
- (15) 　　同じものです。
- (16) 　　これは鍋ですね。こういう非常に須恵器に近いような鍋が備中南部、あるいは草戸干軒なんかでもたくさん出てきております。むしろこれは室町・16世紀位に入るもんだらうと考えております。平安の擂鉢とはちょっと関係ありませんけれど、こういうものが亀山ではずっと焼かれるようであります。
- (17) 　　こういう内側に耳を持つ内耳鍋と呼んでおりますけれども、ここへ紐あるいは蔓なんかでくくりまして上からさげるようになっていた鍋ですね。
- (18) 　　こういう文福茶釜みたいなものも須恵質のものからいわゆる土師質のものまでいろいろ焼いているようであります。
- (19) 　　これは後で出てきますのでこの形をちょっと覚えといていただいて、ここへ片口がつくもの。これは手甲羅と呼んでおりました胡麻をいったり豆をいったりするものです。
- (20) 　　これは現代の窯なんですけれども、先ほどの窯を地中へ掘るんじゃなくて外へ出すと、このようになるという感じです。現在もこれ二基だけなんですけれども大原焼という名で焼かれております。これはここが四角くなっておりますけれどもこれを丸くすれば全く魚住窯とか沖の店遺跡で出ておりました窯と同じような形態になります。ここではこの天井をふさぐことによりまして土師器を焼きます。ふさぐことと言うか煙突をつけることによって土師質のものを焼きます。それで煙突を伏せた後、松葉をここからくべることによって瓦器質のものを作ります。これは大きいものを焼いておりますけれども、後で作品が出てきますけれども、こういうような形でこの窯の中でも焼き分けを行っておるわけなんです。
- (21) 　　これも横から。
- (22) 　　(23) 　　(24) 　　(説明無)
- (25) 　　先ほどのサナと呼んでいたものは今ではこういうふうに耐火レンガでやっております。

²⁶ これは大きな先ほどの鍋とか、今は茶器がほとんどなんですけれども、大きいものをこういうふうになへぎりぎりまで焼いておるわけなんです。

²⁷ (説明無)

²⁸ 先ほどの手甲羅といいましたのはこういうもので、これは向きが逆になっておりますけれども、これはもう燻べて焼いた瓦器質になっているわけなんです。

²⁹ 焼き上りはだいたいこんなような色なんです。もう少し土師質で赤く焼ける場合もあります。

現在はこういうものを作っております。

³⁰ 化粧してこういうふうになへておりますけれども。

³¹ ~ ³² (説明無)

³³ これは大飛島遺跡出土の灰釉陶器でございます。

³⁴ これは陶邑産須恵器の瓶になるかもわかりませんが。

以上が私の報告であります。これで終わらせていただきたいと思います。(発表以上)

— 質疑なし —